

# 新しい小学校英語教育を支える簡易音声録音機等を活用した学習環境の構築

～英語慣用表現の定着と国際交流授業の実践～

秋田大学教育文化学部附属小学校

〒010-0904  
秋田県秋田市保戸野原の町13の1

<http://fuzoku@aes.akita-u.ac.jp>

## 1. 研究の背景

文部科学省による小・中・高等学校の英語教育改革が着実に進められている。その柱は、小学校高学年での外国語活動の教科「英語」化及び外国語活動の中学年への移行と CAN-DO リスト形式での学習到達目標の設定と評価を通じた中・高等学校英語教育の改善である。本校では、外国語活動において、実践的なコミュニケーションを体験させるための効果的な手立てを講じることで、児童の英語学習への意欲を高め、学習内容の定着が自然な形で可能になるであろうとの仮説に基づき研究を進めている。先導的実践の取組を公立学校に発信し、秋田県教育の充実・発展に貢献するという使命を担う本校としては、この機会に小学校英語教育の改善により具体的に取り組むことが急務であると考えた。

## 2. 研究の目的

- (1) 楽しみながら英語に触れることができる環境を充実させることで、意欲的・自発的に英語学習に取り組む児童を増やす。
- (2) 小学校英語教育における ICT 利活用を一層促進するとともに、動画配信システム Skype やピンポン・イングリッシュの他教科等への転用の可能性を探る。
- (3) 今後の英語教育改革を見据えた先導的な取組を積み重ね、公立学校に発信することを通して、秋田県教育の充実・発展に貢献する。

## 3. 研究の方法

今後取り組むべき研究内容を「指導計画」「指導体制」「学習環境」の3分野に分けて、具体的に設定した。「指導計画」の分野では、CAN-DO リストの独自開発と年間指導計画等への反映、「指導体制」の分野では、外国語活動専科制の導入を大きな柱とした。そして、「学習環境」の分野の柱は、基礎的な英語慣用表現の習得とオーストラリアの児童との交流を一層促進する ICT を活用した教材開発である。

昨年度中に大学の「教育実践研究支援プロジェクト」の研究費助成を使って、簡易音声録音機を活用した音



声教材の試作品を完成させていた。また、インターネット動画配信システム Skype を介したオーストラリアとの交流授業も、すでに前年度までに数回実施済みである。今年度は必要な機材を充実させ、以下の方法で本格的な研究に取り組みたいと考えた。

前年度中に、大学教員との共同研究により、中学校学習指導要領及び解説、英語ノート、Hi, friends! で用いられている慣用表現を分析し「小学英に触れさせたい英語表現集」を作成した。次に、大学院生や留学生の協力を得て、簡易音声録音機に慣用表現を1種類ずつ録音した試作品を数台準備することができた。これを高学年の2クラスに分配して設置してもらい、児童の反応を見ることにした。児童アンケートの結果から、予想以上に興味をもって録音機を操作している様子が見えたとともに、児童からの要望としては「音質をよくしてほしい。」「音量がもっと大きくなるとよい。」「校内のいろいろな場所に設置してほしい。」という声が多く寄せられた。なお、この音声教材は、ドアチャイムのようにピンポンと押すと、ピンポン（卓球）のような英語のやり取りが流れることから「ピンポン・イングリッシュ」と名付けた。この成果を生かしながら、さらに新しい表現を加えて台数を増やし、児童の要望にあった設置場所の拡大を実現する。

また、一昨年度、大学教員の尽力により、オーストラリアの小学生との交流活動の環境が整った。昨年度は Skype を活用したリアルタイムの交流授業を年間数回実施した。ICT 環境を整えてこの活動をさらに充実させる。

#### 4. 研究の内容・経過

##### (1) 英語慣用表現の定着 ～ピンポン・イングリッシュの開発と活用～

###### ① 自主開発のきっかけ

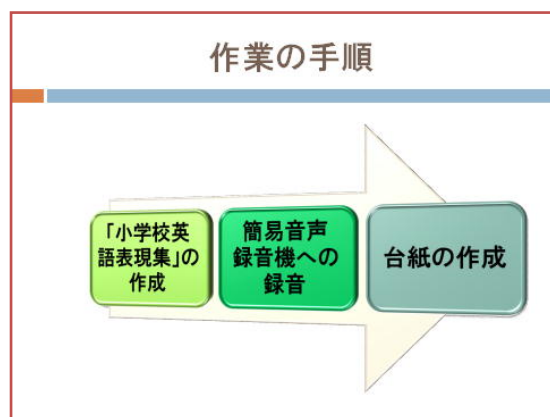
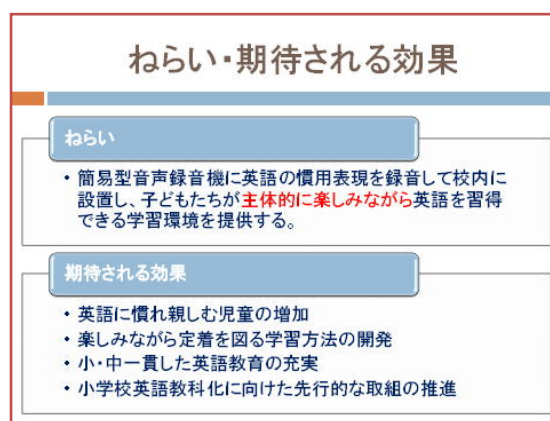
特別支援教育の教材カタログで簡易音声録音機（商品名：ゴートークボタン）偶然目にしたことが、ピンポン・イングリッシュの発想の始まりだった。録音時間 10 秒間、簡単操作で再生・録音可能、コンパクトなデザインなどの仕様から、「音声付きの英語慣用表現集」が思い浮かんだ。子どもたちが主体的に楽しみながら英語を習得できる学習環境を提供する機器を自主開発してみようと考えた。

###### ② 「小学校英語表現集」の作成

ア 選定する表現は、あいさつやつなぎ言葉などコミュニケーションをより円滑にするためのものとする。

イ 中学校学習指導要領及び解説、中学校使用教科書、英語ノート、Hi, friends! で用いられている易しい慣用表現を中心に 100 程度をリストアップする。

ウ リストを基に、大学教員、中学校英語教員、小学校教員、さらにはALTなどの協力を得



て50程度に絞り込み、表現集にまとめる。

### ③ 「ピンポン・イングリッシュ」の開発

ア 上記②で絞り込んだリストを基に、自然な応答表現になるように配慮しながら、複数の表現を組み合わせる。より自然な応答表現にするために、必要に応じて、リスト以外の表現を付け加える。

イ 表現の使用場面は「教室内で児童同士が英語でやり取りする学習活動」とする。

ウ 次のような仕様の簡易音声録音機を、リストアップした表現の数だけ準備する。

- ・録音時間 10 秒程度のもの
- ・大きさは、5 cm程度のボタン型
- ・裏面は、校内の壁やホワイトボード等に掲示できる粘着性かマグネット式のもの
- ・録音は、容易でくり返し書きできるもの

エ 音声の録音には、ALTや留学生の協力を得て、さまざまなタイプの声を用いて行い、聞いていて楽しくなるように配慮する。

オ 重要度の高いものは、複数個作成する。

カ A4サイズのマグネットペーパーに児童のイラスト、英語表現、日本語訳などを添付して、簡易音声再生機と組み合わせる。

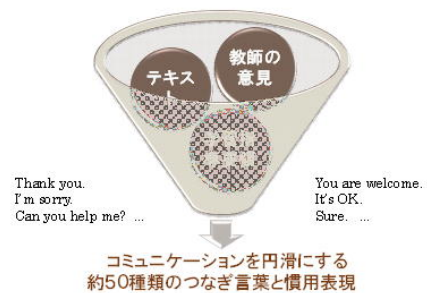
キ 教室内や廊下など自由に触れることができる場所に設置する。

ク 結果的に現在 34 種類、約 100 個のピンポン・イングリッシュを全学年に分配している。今後、児童の反応を見ながら、録音する表現の更新や設置場所の移動を行う。

### ④ 「ピンポン・イングリッシュ」の活用例

5年生の外国語活動では、ゴールを留学生との交流会を楽しむこととして、単元を構成した。Hi, friends!を使って数時間の活動を楽しんだ後、学級担任の海外研修の経験や収集した資料に基づいて、海外の学校事情を学ぶ活動を行い、留学生への関心を高めた。

## 英語表現集の素材



## 録音作業の様子



## 台紙のデザイン



## 子どもたちの様子





その後、児童は留学生に尋ねたい内容を決めたり、ピンポン・イングリッシュを使って、うまく聞き取れなかったときの聞き返し方や定型的な受け答え、自分の意見や考えを伝える表現などを確認していました。一人でくり返し練習する児童もいれば、友達同士でやり取りを楽しんでいるグループも見られました。

一人一人が十分に準備して臨んだ交流会では、初対面の留学生がほとんどだったため、児童ははじめは緊張でなかなか英語が出てこない様子であった。お互いに名前や誕生日、好きなことや好きな食べ物などを紹介し合うと、自然に笑顔になり笑い声が広がった。

児童たちも留学生たちも自分の考えや思いをなんとかして相手に伝えようと、一生懸命に言葉を探したり、ジェスチャーやイラストを用いたりしながら、会話をつないでいた。サポート役の三人（学級担任、ALT、交流コーディネーターの大学院生）は、最初はあちらこちらからあがる支援を求める声に戸惑って大忙しだった。しかし、徐々に児童も留学生もコツをつかんできて、自分たちだけでどんどん交流を進めるようになったため、最後はサポート役も交流の輪に加わっていた。

## (2) 国際交流授業の実践 ～インターネット動画配信システム Skype と電子黒板の活用～

本校の外国語活動部では、一昨年度からオーストラリアの St. Peter and Paul's Primary School との交流を続けている。交流はインターネット動画配信システム Skype を介して行っており、今年度は主に6年生が交流授業を体験した。年間3回の交流であったが、そのうちの1回は本校の公開研究協議会の提案授業の目玉として提示した。これは、本校児童が相手の趣味や関心事を聞き出しながら、それに合った日本の名所・観光地を紹介するという活動であった。

体験した児童は、「うまく伝わらないところは、日本語で聞き返してくれた。オーストラリアの友だちも日本語の勉強をがんばっているということが分かったのだから、私ももっと伝わるような英語を話せるようになりたい。」「オーストラリアの人が日本や日本語の勉強をしていることに感心したし、日本人として誇りに思った。」「写真を見せたり紹介したりすると“Beautiful!” “Pretty!” “Cool!” と言ってくれ



た。会話をつなげるために、他にも“One more time, please.” “Do you have any questions?” など、会話の途中で使う言い方を、もっと知っておきたい。」など、リアルタイムでの交流体験がもたらす実感の伴った感想を数多く述べていた。また、上記の3人目の感想にある「会話をつなげるために・・・会話の途中で使う言い方を、もっと知っておきたい。」という思いは、まさにピンポン・イングリッシュのねらい・内容と合致しており、今後 Skype とピンポン・イングリッシュとの相乗効果による英語学習への意欲の向上がますます期待される。

## 5. 研究の成果

### (1) 英語学習環境の整備

自作の音声教材であるピンポン・イングリッシュは、「あいさつ」「はなしはじめ」「ききかえし」「うけこたえ」「意見や考え」という5つの場面設定で、34種類、約100個を製作した。昨年度の試作・試行段階では約20個を高学年教室付近に設置した。設置1週間後に行ったアンケート結果からは、児童の関心は高く、かなりの頻度で触れており、慣用表現の確認・定着に活用していることが分かった。今年度、研究助成金の一部を使って、約80個を追加製作することができ、低学年から高学年まですべての児童に楽しみながら英語学習ができる環境を提供することができた。

なお、隣接する附属中学校内に「国際交流室」が設置され、大学の留学生たちとのパイプ役となる大学院生が配属されている。「国際交流室」の活動の一つとして、ピンポン・イングリッシュの録音作業を位置付けたことで、児童と留学生との距離が縮まり、前述の「留学生交流会」が実現した。交流会が来年度の5年生の年間指導計画にきちんと位置付けられることになったことは大きな成果である。

### (2) 国際交流授業の定着

今や国際交流授業は6年生の学習の大きな柱となっている。児童はとても楽しみにしており、それまでに慣れ親しんだ表現や様々なコミュニケーション・ストラテジーを駆使して、オーストラリアの友達との意思伝達に積極的に挑戦している。Skype を介したリアルタイムの交流は、従来のテレビ会議システムと比較して画像・音声とも格段にスムーズで鮮明・明瞭である。交流授業後に児童の英語学習への意欲がさらに高まることが最大の効果である。

### (3) ICT 利活用の推進

本研究助成金の一部を使って、PCを1台追加購入したことで、すべての電子黒板に専用PCが設置できて、可動性を一層向上させることができた。情報教育指導担当教員が、毎年度、電子黒板操作・利活用研修会を実施し、職員の力量を一定レベルに保つことに貢献している。今後、Skype を含む電子黒板の活用が一層促進するものと期待している。

また、研究助成金の一部で「ぼうけん君」も購入することができた。6月に実施した第3回校内研修会では、体育科と生活科で「ぼうけん君」を使った授業を提示した。活用方法に改善の余地を残しながらも、手軽さや児童への圧迫感の軽減など従来の映像機器以上の使い勝手のよさを実感した。今後、他教科での活用が期待される。

さらに、教師用にタブレットPCをiPadとウィンドウズ・タブレットを1台ずつ購入するとともに、職員をタブレットPCの研修にも派遣した。研究の結果、本校の目指す教育を支援するよりよいツールとしてウィンドウズ・タブレットを選定することができた。

## 6. 今後の課題・展望

来年度の導入を目指して、予算要求している ICT 機器は、ウィンドウズ・タブレット及び周辺機器、電子黒板と専用 PC である。導入された際には、今年度の研究の成果を生かしたより効果的な活用に努めたい。

ウィンドウズ・タブレットを選択した理由の一つとして、ピンポン・イングリッシュのデジタル教材化がある。現在、簡易音声録音機（ゴートークボタン）とマグネットペーパーの組み合わせで製作している内容をパワーポイントの画面上で児童が自由に操作できるようにしたい。これにより、児童アンケートで要望が多かった「もっと音質をよくする」「もっと音量を大きくする」という課題が解決できると考える。

「国際交流室」の活動の拡充方策として、留学生の常置・児童生徒との常時交流体制の構築と Skype による国際交流活動の常態化がある。「国際交流室」に電子黒板等、必要な機器を整備したい。授業時間はもちろん休み時間などに児童生徒が「国際交流室」を自由に訪れて留学生との交流や Skype を介した国際交流を存分に楽しめる環境を実現したいと考えている。

## 7. おわりに

本校では、5年後の附属小学校の在るべき姿のグランドデザインを描き、平成 27～32 年度の 5 年間に推進すべき重点施策をまとめた「教育振興基本計画 魅力ある学校づくりプラン」を策定した。その中の教育環境整備の分野に「教育の ICT 化への対応」をしっかりと位置付けて、来年度からより積極的に取り組むこととした。その具体的な取組内容を精査・検討する段階では、本研究助成金を活用した今年度 1 年間の研究成果が大いに参考になった。本校にこのような研究の機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。

## < 参考文献 >

- ・平成 26 年度研究紀要「仲間と共につくる豊かな学び」 秋田大学教育文化学部附属小学校